

[原 著]

フラナリー・オコナーの作品における “good” について

—“good” にまつわる 3 作品と女主人公たち—

中村文紀*

(2005 年 5 月 8 日受付, 2006 年 7 月 27 日受理)

How “Good” Are They?

—Three Women in Flannery O'Connor's “Good” Trilogy—

Fuminori NAKAMURA

“Good” is the only word Flannery O'Connor repeatedly applied for her story titles, as well as using it frequently in her stories. What people consider to be “good” would be influenced by their background, differing individually. Through reading her “good” stories (“A Stroke of Good Fortune,” “A Good Man Is Hard to Find,” and “Good Country People”), this paper will explore what is “good” for the lady protagonists and for O'Connor herself.

The grandmother in “A Good Man Is Hard to Find” inherits traditions of the Old South. Though she seems a conservative Christian, she commits sins such as lying which finally leads her family to death. Nevertheless she believes herself to be a “good” person and seems to deify herself. Ruby in “A Stroke of Good Fortune” and Joy/Hulga in “Good Country People” are depicted as characters of the New South, refusing the lifestyle of the Old South. Ruby, leaving an Old South town, lives in a city and is married to a man from Florida, a state which is geographically distinguished as part of the South but far different from the other states in the region in cultural characteristics. Joy/Hulga has a Ph.D. in philosophy and looks down on Southerners with their pure ignorance. (Her weak heart takes her back to the country.) On the surface, these two have nothing to do with religion, but, in a different sense from the grandmother, they consider themselves as “good” or almighty.

Though these three women are originally conceited, God's grace makes them realize what they should be by the end of each story. The grandmother encounters a criminal called the Misfit and is shot by him, but she comes to recognize the real meaning of prayer. Though O'Connor is a Catholic, not a Protestant, she accepts the conservative religiosity of Protestant Southerners. This is why the grandmother, a woman of the Old South, is redeemed in the end. As for Ruby, a chance encounter with Hartley, who is called Little Mister Good Fortune by his mother, literally opens her eyes to accept her real fortune: bearing her baby. Joy/Hulga is robbed of her artificial leg by a pseudo Bible salesman Manly Pointer. The robbery also takes away her artificial thought and she re-claims her Southern nature. It is true that Ruby and Joy/Hulga regain their identity, but we cannot find lines in the text of their redemption. If those two protagonists come to believe in God as the grandmother does, they would be saved.

* 外国語研究室非常勤講師

Key words: American Literature, Flannery O'Connor, American South, Religion

キーワード: アメリカ文学, フラナリー・オコナー, アメリカ南部, 宗教

はじめに

フラナリー・オコナー (Flannery O'Connor) の作品タイトルで重複して用いられていることばは、冠詞や代名詞をのぞけばただ一つ、“good” だけである。そればかりか、オコナーの作品ほぼすべてにおいて、複数回ずつ使われている頻出語でもあり、それほど彼女はこのことばに強い意識を向けていたといえる。しかし、何を“good”であると考えるか、その判断には各人の生まれ育った環境や文化的背景などが大きくかかわってくるものだ。オコナーは南部カトリック作家として知られ、その冠された二つの要素が作品に投影されていることは自身も認めている。殊にカトリック教徒という点に着目すれば、“good”は聖書で655回¹⁾も用いられていることから、オコナーにとって身近かつ重要な意味をもつことばであったことは察しがつく。

むろんオコナー研究の先人たちはこの言葉に着目し、様々に論じてきている。しかし筆者がみた限り、“good”がタイトルに冠された3作品すべてを取り上げ、南部というオコナー作品独特の背景を考慮に入れながら比較検討した先行研究はみあたらない。そこで本稿では、“good”がタイトルに冠された3作品——「幸運の一撃」(“A Stroke of Good Fortune,” 1949), 「善人はなかなかいない」(“A Good Man Is Hard to Find,” 1953), 「善良な田舎者」(“Good Country People,” 1955)——を中心に切り上げ、各作品の女主人公にとっての“good”, さらに作者オコナーにとっての“good”について考えてみたい。なお、オコナーの作品では恩寵のおとずれの前と後でストーリーや人物像が大きく変化する。そこで、まずは各作品の前半について考察し、恩寵にかかわる後半部については結論の項でまとめて論じることとする。

1. グランドマザー——旧南部の生き残り

「善人はなかなかいない」の主人公グランドマザー (grandmother) は、今回取り上げる3人の中で唯一古きよき時代の南部、つまり旧南部 (Old South)²⁾の伝統をもった人物といえる。南部の女性

を描いた映画『マグノリアの花たち』(*The Steel Magnolias*, 1989) で、クレアリー・ベルチャー (Clairee Belcher) は「私たちと動物が唯一違うのは、アクセサリーでおしゃれができるかどうかよ」と語っているが、伝統的な南部の女性たちは外見について過剰なまでの意識を向けている。

The old lady settled herself comfortably, removing her white cotton gloves and putting them up with her purse on the shelf in front of the back window ... the grandmother had on a navy blue straw sailor hat with a bunch of white violets on the brim and a navy blue dress with a small white dot in the print. Her collars and cuffs were white organdy trimmed with lace and at her neckline she had pinned a purple spray of cloth violets containing a sachet. In case of an accident, anyone seeing her dead on the highway would know at once that she was a lady. (CS 118)

これは息子一家と旅に出るグランドマザーの服装を描写したものだが、オコナーは彼女が旧南部の伝統を保持しているということを目に見えるかたちで表現したといえよう。また後段で車が崖から転落してもなお「帽子が頭から離れない」(CS 125)とあるが、いかなる状況でも南部女性としてあり続けるグランドマザーの強固なアイデンティティを示していると考えられる。

そんな彼女は旅行の途中でザ・タワー (The Tower)——「こんなにきつたない場所なんて、百万ドルもらったって住まないわよ!」(CS 121)と孫のジュン・スター (June Star) がいうような、南部の田舎の店——に入り、店主のレッド・サミー (Red Sammy) と次のような語らいをする。

“These days you don’t know who to trust,” he said, “Ain’t that the truth?”

“People are certainly not nice like they used to be,” said the grandmother.

... Red Sammy said, “... Now why did I [let two fellers [sic] people charge the gas they bought]?”

“Because you’re a good man!” the grandmother said at once.

“Yes’m, I suppose so,” Red Sam said as if he were struck with this answer. (CS 122)

“A good man is hard to find,” Red Sammy said. “Everything is getting terrible. I remember the day you could go off and leave your screen door unlatched. Not no more.” He and the grandmother discussed better times. (CS 122)

このあとさらに「彼とグランドマザーは今よりもっとよかった時代について語り合った」(CS 122)と続くが、ここでの“good man”とは古きよき時代の南部人を指していることがわかる。別の箇所でもう一人の孫ジョン・ウェスリー (John Wesley) が「ジョージアなんてさっさと通過しちゃってよ。どうせ見るものもないし」(CS 119)と述べたのにたいし、グランドマザーは「私が小さい子どもなら……自分の生まれた州をそんな風にはいいませんけどね。テネシーには山があるし、ジョージアには丘があるでしょ」(CS 119)と返すが、彼女は南部らしさが消えつつある現状を嘆きつつ、自身は南部の伝統をもち続けている“good man”であると信じているのだ。

グランドマザーがいうところの“good man”，すなわち伝統的な南部人とは、アメリカ英語についての大著『アメリカの言語』(*The American Language*, 1921)を上梓したH・L・メンケン(H. L. Mencken)が「聖書地帯」(Bible Belt)と呼んだほど聖書を絶対視し、時として狂信的な宗教性をもっている。これについては図版資料1, 2のほか、あの1920年代³⁾にあって反進化論法が成立し、さらには極右勢力KKKが台頭したことなどからも明らかなり。彼女のそうした篤い宗教心は作品で非常に大きな意味をもつ。

レッド・サミーの店を出た一行はジョージアを南

下し、目的地フロリダに向かう。その途中、グランドマザーはかつて訪れたプランテーションが近くにあることを思い出し、なんとかして一見したいと思いはじめる。その気持ちをただ話すだけでは誰も納得してくれまいと思った彼女は、「秘密の壁板」(secret panel)があるという話をでっちあげ、子どもたちを煽ることでその願いを成就させる。車が舗装されていない赤土の道を進んでいく最中、グランドマザーの頭に恐ろしい考えがよぎる。あのプランテーションはジョージアでなくテネシーだった——その事実を隠さねばと動揺するあまり、彼女は隅に置いてあったカバンをひっくり返してしまう。これによりカバンの下に置いてあった籠から家族に黙って連れてきた猫ピティ・シング(Pitty Sing)が運転している息子ベイリー(Bailey)目がけて飛び出し、驚いた彼が急ハンドルをきったため、車は一回転して崖下へ転落するのだ。そんな折、脱獄囚のミスフィット(Misfit)らが車で通りかかる。一家を皆殺しにしようとするミスフィットに対し、グランドマザーは“good man”と呼び、なんとかして命だけは助けてもらおうとする。

“I know you’re a good man. You don’t look a bit like you have common blood. I know you must come from nice people!” (CS 127)

“You shouldn’t call yourself The Misfit because I know you’re a good man at heart. I can just look at you and tell.” (CS 128)

処女長編『賢い血』(*Wise Blood*, 1952)において、タクシーの運転手が説教師の格好をした主人公ヘイゼル・モーツ(Hazel Motes)にむかって“[Preachers]’ve all got too good to believe in anything” (WB 32)という場面があるが、これはオコナー作品のプロテスタント教徒大半にあてはまる特徴であるといえる。カトリックが法王を中心とするタテ社会を維持し続けている一方、聖書を様々に解釈していった結果として、プロテスタントには数え切れぬほどの教派が存在している。しかし裏を返せば、個人と神との直接的な結びつきが強調されるあまり、「神については何でも知っている」「いつでも神意に沿って行動している」という自負、さらには

カルト的な信仰さえ生まれてくる可能性もある。グランドマザーも「もし祈ればね……あなたはきっと救われますよ」(CS 130) と説教師よろしくミスフィットに祈りの必要性を説き、さらには先にあげたように「分かっているのよ」(I know) などと語り、自身が善悪の判断ができる立場にあると信じているのだ。とはいえ、そもそも事件を引き起こした「秘密の壁板」の話は——たしかに南部へのノスタルジアゆえではあるのだが——子どもを誘惑するための嘘、つまり罪(sin)なのである。しかも、彼女はそれを悔いることがないばかりか、ミスフィットと対面する場で「車は二回転したのよ!」(CS 126) と事実を誇張して伝え、さらに罪を重ねていく。批評家ローレンス・エンジョルラス (Laurence Enjolras) はグランドマザーを「うぬぼれの強い、ひとりよがりのキリスト教徒」のひとりと位置づけているが(31-41)、彼女のような旧南部人の保守的な信仰心は、その強さゆえ自身を“good man”であると感じ、結果として自身を神格化しているといえよう。

2. ルビーとジョイ=ハルガ——新南部に洗脳された人びと

グランドマザーが旧南部の人物であるならば、「幸運の一撃」のルビー・ヒル (Ruby Hill) と「善良な田舎者」のジョイ=ハルガ・ホープウェル (Joy/Hulga Hopewell) はその対極にある新南部 (New South)——ヘンリー・グレイディ (Henry Grady) が名づけた、北部化された新しい南部——の人物であるといえる。果たして旧南部人と新南部人で、“good”の用い方や意識に差異はあるのだろうか。

「幸運の一撃」の主人公ルビーは、都市のマンスヨンの4階に住んでいる。生まれはピットマン (Pitman) という崩壊してしまった旧南部の町なのだが、“All the people who had lived in Pitman had had the good sense to leave it, either by dying or by moving to the city.” (CS 96) とあるように、彼女の心はまったく故郷にはなく、故郷を離れて都会で暮らすことこそ“good”であると考えているのだ。このことは結婚相手にビル・ヒル (Bill Hill) というフロリダの人間を選び、「笑わずにはいられなかった……なにせ、どの姉妹よりも存分にうまくやってきたのだから。あの人たちが結婚したのは地元の連中なのだし」(CS 98) と自身を差別化し

ている点からもうかがえる。フロリダは地理的区分では南部に属しているものの、観光地マイアミ (Miami) などが北部をはじめとする上流階級の保養地として繁栄していること、さらには奴隷解放の立役者エイブラハム・リンカン (Abraham Lincoln) の誕生日が州の祝日になっているなど、南部色が非常に薄い新南部的な州であるといえる。別の場面で「あんたの亭主はフロリダの出身だね」とたずねられた際、「ええ、マイアミで生まれたのよ……テネシーなんかじゃないわ」とルビーが答えているが (CS 100)、先の章で扱った「善人はなかなかいない」の冒頭——グランドマザーはフロリダになんていきたくなかった。親戚のいるテネシーの東部にいきなかった (CS 117)——などをあわせて考えると、オコナーは作中の人物にフロリダを旧南部の町と区別させていることがわかる。

さて、そんなルビーは手相見のマダム・ゾリーダ (Madam Zoleeda) から “A long illness... It will bring you a stroke of good fortune!” (CS 96) といわれるのだが、これについて彼女は次のように考える。

She had already figured out the good fortune. Moving... Where she wanted to be was in a subdivision... where you had your drugstores and grocery and a picture show right in your own neighborhood. (CS 96-97)

新南部的な郊外での快適な生活を求め、それが実現することこそ “good fortune” であるとルビーは信じて疑わない。ところが、実際に彼女を待ち受けている本当の “good fortune” とは妊娠のことで、彼女はそれをなかなか認めようとしない。

“Not me!” Ruby shouted. “Oh no not me! Bill Hill takes care of that. Bill Hill takes care of that! Bill Hill’s been taking care of that for five years! That ain’t going to happen to me!” (CS 104)

彼女の母親も姉妹も子たくさんなのだが、それは「純粋無垢な人たち」(CS 97) である旧南部人がすることであると完全に見下している。この “That” と

は避妊のことで、彼女にとっての性行為は子孫を残すという神聖な行為ではなく、快楽の手段でしかないのだ。このように、南部人でありながら旧南部的な信仰心がまったく感じられない彼女は——ときに“*Oh Lord*” (CS 99) や“*God Almighty*” (CS 101) と叫ぶが、これは単なる呼びかけでしかなく、むしろ神への冒瀆にさえ聞こえる——自身の体調不良について“*She had done all right doctoring herself all these years—no bad sick spells, no teeth out, no children, all that by herself.*” (CS 98) と考える。別の箇所でも“*I don't need to go to no doctor... I can take care of myself...*” (CS 103) とも語っているが、彼女はあたかも自身が全能であると信じているかのようだ。いわば、グランドマザーとは別の意味で、自身を神格化しているといえよう。

つづいてもうひとりの新南部人、「善良な田舎者」のジョイ（またの名をハルガ）について考えてみたい。

Many twentieth-century parents continued to view colleges for women as nineteenth-century finishing schools—places where adolescent women could be kept safe from the corruption of the outside world and where they could acquire the grace and bearing of a “lady.” (McCandless 12)

ここで論じられているように、旧南部人、殊に旧南部の女性にとって、学問的知識は無縁なものであった。ところがジョイ=ハルガはというと、母親のホープウェル夫人 (Mrs. Hopewell) が「あの子は〔哲学の〕博士号なんてとらなければよかったのに、そう考えずにはいられなかった」 (CS 276) と嘆いているように、南部淑女としての振る舞いを身につけるどころか研究にうちこみ、ついには博士号を取得する。そんな彼女は、いうまでもなく旧南部とのつながりを拒否していくのだ。

Joy had made it plain that if it had not been for his condition [having a weak heart], she would be far from these red hills and good country people. (CS 276)

これは作品の前半で唯一ジョイ=ハルガと“good”との関わりがみられる箇所だが、この「善良な田舎者」という言い回しは、ホープウェル夫人の“*Why! ... good country-people are the salt of the earth! ... Why, I think there aren't enough good country people in the world! ... I think that's what's wrong with it!*” (CS 279) という台詞に由来すると思われる。グランドマザー同様、夫人は自身やまわりの旧南部人こそ“good”であるといっているかのようだ。しかし、ここでジョイ=ハルガが母親のことを転用しているのは、決して母親と同じ価値観にたっているからではない。直後に「〔心臓の病気がなければ〕⁴⁾ 彼女は大学に残って、自分の話していることが分かってくれる人たちに講義をしているはずだった」 (CS 276) とあるように、むしろ“good”だと思いこんでいる無知な旧南部人を扱き下ろし、さらに自身を彼らと区別しているといえる。

「私は神だって信じはしない」 (CS 285) と述べていることから明らかなように、ジョイ=ハルガには旧南部らしい保守的な宗教性のかけらもみられない。彼女は虚無主義者で無神論者として描写されているのだが、そんな彼女もまたルビー同様、自身を神格化しているといえる。というのも、“*Woman! do you ever look inside? Do you ever look inside and see what you are not? God!*” (CS 276) と説教師のように語り、さらに“*True genius can get an idea across even to an inferior mind.*” (CS 284) や“*I don't have illusions. I'm one of those people who see through to nothing.*” (CS 287) のように、自分は他の人びとと違い、全能の神のようにすべてを見通しているともいわんばかりなのだ。さらに、彼女は親から与えられたジョイという名前をハルガと勝手に改名し、その名が“*She had a vision of the name working like the ugly sweating Vulcan who stayed in the furnace and to whom, presumably, the goddess had to come when called.*” (CS 275) とローマ神ウルカーヌスや女神とのつながりを彷彿させると考えている。これはまさに神格化の証といえよう。

このように2人の新南部人は、旧南部の風土に本来のアイデンティティをもちながら、それを否定しようとしている。しかしながら、旧南部人とはまた

別の形で自身を神格化し、神の高みにおいているのである。

結 論

これまで3作品の前半部を取り上げてきたが、最後に恩寵の到来がみられる各作品の結末について考察していきたい。

「善人はなかなかいない」のグランドマザーは、その篤い信仰ゆえ、自身を神格化していた。先にも論じたように、一家の悲劇は彼女の嘘という罪に起因するのだが、その神格化ゆえ、彼女は恩寵あるいは奇跡のおとずれをそれと感ずることはできない。たとえば、車が一回転するほどの事故であったにもかかわらず一行は全員無事だったが、これはまさに奇跡といえるだろう。しかし、彼女はそれに感謝するどころか、いかに家族の非難から逃れるか、そのことで頭が一杯になり、結局は「あの家があるのはテネシーだったことは言わないでおこうと決めた」(CS 125)と嘘の上塗りをするのだ。

しかし、家族がひとりふたりと射殺され、いよいよ残りは自分だけになったとき、命を助けてほしいというだけであった自分本位の祈りが変化する。

"I wasn't there so I can't say He didn't.... I wisht I had of been there.... if I had of been there I would of known and I wouldn't be like I am now." (CS 132)

これはミスフィットがイエスは死人を生き返らせたかについて考えている場面だが、自分の態度や犯した犯罪を悔いると同時に、神に認めてほしい、救ってほしいという希望の表れのようにも見える。そしてこれを聞いたグランドマザーは、聖母マリアのような無条件の愛を注ぐのだ。

[S]he murmured, "Why you're one of my babies. You're one of my own children!" She reached out and touched him on the shoulder. (CS 132)

ところが、あまりの優しさに驚いたのか、ミスフィットは彼女の胸に銃弾を撃ち込んでしまう。こうしてグランドマザーの人生は幕を閉じるのだが、

"[The beatific description of the grandmother at the end of the story] is a portrait of the once wizened and fearfully selfish old lady born again through the mystery of a faith..." (134) と批評家のキルコース (George A. Kilcourse) も述べているように、これはまさに「生まれかわり」(born-again)——永遠の生のはじまり——であるだけでなく、グランドマザーがミスフィットに恩寵をあたえる神の道具となった瞬間ともいえるのだ。しかし、カトリック作家のオコナーがなぜ典型的なプロテスタントの南部人グランドマザーに救いをあたえたのだろうか。

For Flannery O'Connor was herself once asked what kind of Christian she would be if she were not a Roman Catholic. The questioner assumed that she would name something genteel and respectable: Episcopalian, Presbyterian, Lutheran, perhaps even high-church Methodist, though certainly nothing Baptist of any stripe whatever. O'Connor replied, shockingly, "I would be Pentecostal Holiness." For her... Christian belief was never a matter of social convenience or civic conformity." (Wood, "Flannery O'Connor" 14)

たしかにオコナーは客観的に南部の宗教性を観察し、その神格化するという欠点を描いてはいるものの、神（あるいは聖書）と正面から向き合おうとする彼らの姿勢を全面的に肯定していると考えられるのだ。

では、信仰心のない2人の新南部人の結末はどう描かれているのだろうか。まず「幸運の一撃」のルビーについて考えてみると、彼女もまた宗教的な意味で「奇跡」に目を向けることはできない。彼女にとっての「奇跡」とは、妊娠という天の賜物ではなく、夫が売っている "Miracle Products" (CS 96) という商品であり、さらにはその夫との享乐的、快楽的な生活だといえる。批評家マクミューレン (Joanne Halleran McMullen) に倣って考えれば、出産目的でない性行為は「大罪」(mortal sin) であり (85)、グランドマザー同様、彼女も罪を犯してい

るのだ。そんな彼女の目を開かせる役を担うのは“Little Mister Good Fortune”と呼ばれるハートリー・ギルフィート (Hartley Gilfeet) 少年だ。この名前はロッドマン (Rodman) という彼の父が死の床で「お前に与えられたのはあの子だけだったな」といった折、母親がすかさず“... you given me a fortune!” (CS 98) と返したことから名づけられた。おそらく金銭的には恵まれないこの夫婦にとって、ハートリーは唯一の“good fortune”なのであり、避妊をして性行為に快樂しか求めないルビー夫婦とは対極にあるといえる。その“good fortune”の象徴であるハートリーは、作品のクライマックスでルビーに体当たりをする。まさに幸運の一撃 (a stroke of good fortune) であり、ここから彼女は名実ともに「目が開き」，“Good Fortune, Baby.”と妊娠の事実を認めるのだ (CS 107)。かくしてルビーは本当の自分の姿、アイデンティティを受け入れたといえる。

つづいて「善良な田舎者」のジョイ＝ハルガをみたい。彼女の「気づき」の場面は、彼女が身につけていた義足を聖書のセールスマンであるマンリー・ポインター (Manly Pointer) に盗まれることではじまる。先の引用で示したように“True genius”と自らを神格化していたジョイ＝ハルガは、当初“good country people”つまり無知な旧南部人にみえたポインターを精神的に誘惑しようとする。ところが彼はジョイ＝ハルガが信じているような「本当に無垢」(CS 289) な男ではなく、聖書のはいつているはずのスーツケースにはウィスキーと卑猥な絵柄のトランプ、さらには避妊具が入っているという有様だ (CS 289-90)。この男にとって聖書、あるいは宗教とは、あくまで商売道具のひとつに他ならず、“Miracle Products”を売り物にしていたルビーの夫と重なる。そうとは全く気づかなかったジョイ＝ハルガは、彼に気を許した証として義足をはずし、これを奪われてしまうのだ。

オコナー自身が “[I]t is implied that her fine education has got rid of [faith] for her, that purity has been overridden by pride of intellect through her fine education.” (HB 170) と述べているように、ジョイ＝ハルガの立派な学歴は彼女の純粋さ、さらには旧南部的な信仰を隠してしまったといえる。しかしこれは新南部的ないわば人工的な

もので、同じく人工的である義足が期せずしてはずれたことで、彼女は“nature”つまり旧南部のアイデンティティを回復する。母親のホープウェル夫人あるいはグランドマザーよろしく、次のように叫んでいることは、その何よりの証といえよう。

“Aren't you... aren't you just good country people?... You're a Christian!... You're a fine Christian! You're just like them all—say one thing and do another. You're a perfect Christian, you're....” (CS 290)

オコナーは“The present state of the South is one wherein nothing can be taken for granted, one in which our identity is obscured and in doubt.” (MM 57) と語っているように、北部文化の流入によって本来の南部文化が次第にその色を失いつつあることを憂えているのだが、この2人にはそうした南部の実情、さらには南部人のアイデンティティを回復してほしいという南部作家オコナーの希望が投影されているとはいえないだろうか。しかし、この2作とも、新南部にいわば洗脳されたふたりがアイデンティティを取り戻したところでストーリーは終わっており、「善人はなかなかいない」のような救いの場面は描かれていない。南部に生まれ住んでさえいれば救われるというのではなく、旧南部の保守的な宗教性を取り戻してはじめて救いへの扉は開かれるというのだろう。ここがいかに宗教作家の手になる作品らしい。

このように3作品を概観してきたが、オコナーにとってやはり“good man”は存在し得ないのだろうか。ある手紙の中で彼女は次のように述べている。

“It is possible to know how to be [a good man]. God became man partly in order to teach us, but it is impossible to be one without the help of grace.” (HB 147)

グランドマザーのように「神に取り憑かれた」(Christ-haunted; MM 34) 信心が行き過ぎたあまり神格化するのではなく、かといってルビーやジョイ＝ハルガのように新南部の都市文化や知性に魅せら

れて宗教心を失い、自らを神の高みにおいてしまうのではなく、神に生かされていること、その神秘や恩寵を感じられれば、彼女らはみな苦を経験せずとも“good”でいられたといえよう。しかし、そう感じとれないのが「墮落」した人間の大半なのだ。「どうすれば善人になるかを知ることができる」からといって、誰もが「善人である」とは限らない。むしろ、「原罪の物語」(stories about original sin; HB 74)と自身が定義したこの3作をとおり、オコナーは「ひとりのほかに善い者はだれもいない」、そう訴えかけているのだろう。

there is none good but one, that is, God

(Mark 10:18)

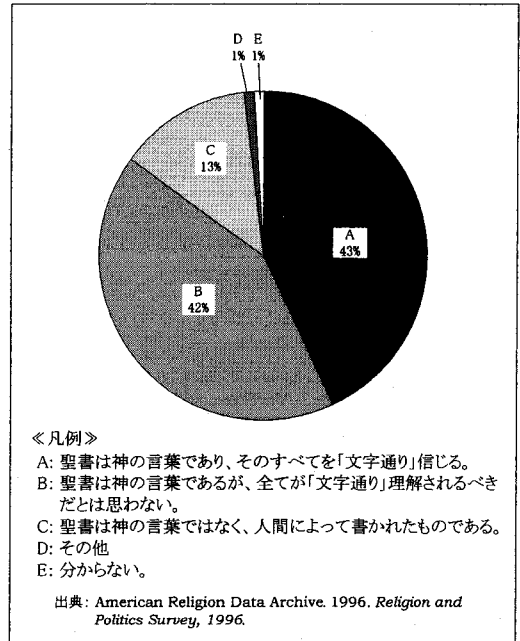
註

* 本稿は2003年11月27日、日本ナサニエル・ホーソーン協会東京支部会(於・日本大学文理学部)で口頭発表したものに加筆・修正を加えたものである。なお、引用文中の下線はすべて筆者による。執筆要領に従って日本語での表記を心がけたが、便宜上および論文の性質から原語のまま表記、引用した箇所も多いことをお断りする。

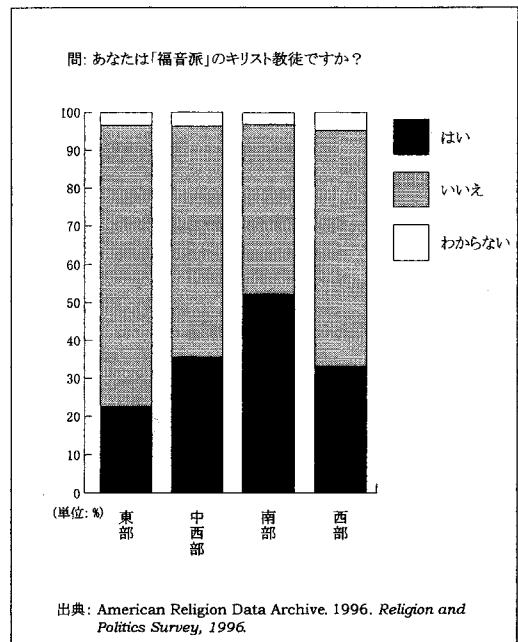
* 「1. グランドマザー——旧南部の生き残り」で論じた「善人はなかなかいない」と“good”とのかかわりについては拙論「Flannery O'Connor のみた南部の『善人』たち——“A Good Man Is Hard to Find”を中心に」(ポップカルチャー学会『A.P.O.C.S.』第2号所収)でも触れているが、3作品の比較上必要であるため、ここでは前回の議論に加筆・修正を施しながら再論している。

* 本稿の執筆にあたっては外国語研究室主任の秋山庵然教授にご助言を賜った箇所もある。ここに記して感謝の意を表したい。

- 1) New International Version (NIV) を収録した *Rainbow Study Bible for Windows* (CD-ROM 版) の検索結果による。
- 2) War between the States (1861-65) の終戦と同時に、北部は Reconstruction と称して南部文化に手を入れ、連邦への再統合を進めた。農村部はそれまでの南部色を一層強めたに過ぎなかったが、Atlanta をはじめとする都市周辺の文化は北部色に染まったといえる。後段で簡単に触れているように、このような産業や科学等が蔓延する変容した南部を



資料1—南部人と「神」



資料2—「福音派」と地域

Henry Grady は New South と名づけた。また、対照的に戦前の南部(および戦後もその伝統を維持し続ける地域)を Old South と呼ぶ。

- 3) 第一次世界大戦に勝利した影響から、1920

年代は空前絶後の好景気となった。軍需技術を転用して車や電化製品の大量生産が進んだため、人びとの生活スタイルが大きく変化した。同時に、Jazz Ageなどの別称にも明らかなように、殊に東部を中心としてパーティなどの乱痴気騒ぎに明け暮れた人びとも多く、道徳の頹廃が進んだ時代でもあった。キリスト教原理主義者を中心とする保守派の人びとは、これに歯止めをかけるべく、禁酒法や反進化論法——聖書の創造説と矛盾するため子どもに悪影響と考えられた——を制定したのである。

- 4) 原文の“*She had a weak heart.*”は「心に欠点がある」とも解釈できる。オコナーは研究者や教師といった知識人、教養人を信仰とかけ離れた人物として描くことが多く、ジョイ＝ハルガもその系譜にあるといえよう。

主要参考文献

- Baumgaertner, Jill Pelaez. *Flannery O'Connor: A Proper Scaring*. Chicago: Cornerstone Press Chicago, 1999.
- Brinkmeyer, Robert H., Jr. *The Art and Vision of Flannery O'Connor*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1989.
- Edmondson, Henry T, III. *Return to Good and Evil: Flannery O'Connor's Response to Nihilism*. Lanham: Lexington Books, 2002.
- Enjolas, Laurence. *Flannery O'Connor's Characters*. Lanham: University Press of America, 1998.
- Giannone, Richard. *Flannery O'Connor and the Mystery of Love*. New York: Fordham UP, 1999.
- Kilcourse, George A., Jr. *Flannery O'Connor's Re-*

- ligious Imagination: A World with Everything off Balance*. New York: Paulist Press, 2001.
- McCandless, Amy Thompson. *The Past in the Present: Women's Higher Education in the Twentieth-Century American South*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1999.
- McMullen, Joanne Halleran. *Writing against God: Language as Message in the Literature of Flannery O'Connor*. Macon: Mercer UP, 1996.
- O'Connor, Flannery. *The Complete Stories*. New York: Noonday Press, 1999.
- . *The Habit of Being*. Ed. Sally Fitzgerald. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979.
- . *Mystery and Manners: Occasional Prose*. Eds. Sally and Robert Fitzgerald. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1969.
- . *Wise Blood*. New York: Noonday Press, 1997.
- Prown, Katherine Hemple. *Revising Flannery O'Connor: Southern Literary Culture and the Problem of Female Authorship*. Charlottesville: UP of Virginia, 2001.
- Seel, Cynthia L. *Ritual Performance in the Fiction of Flannery O'Connor*. Rochester: Camden House, 2001.
- Wood, Ralph C. *Flannery O'Connor and the Christ-Haunted South*. Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing Co., 2004.
- . “Flannery O'Connor, H. L. Mencken, and the Southern Agrarians: A Dispute over Religion More than Region,” *The Flannery O'Connor Bulletin*. Vol. 20. Ed. Sarah Gordon. Milledgeville: Georgia College, 1991.